

平松知子
勅使千鶴
西川由紀子
鈴木佐喜子
大宮勇雄

+
保育実践
保護者手記

今、 幼児期に 大切に したいこと

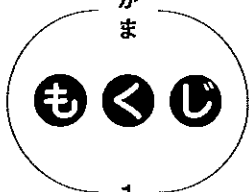
4・5歳児の
あそび
かかわり
学び



編集

全国保育団体連絡会

ちいさいなかま



1月臨時増刊号

表紙イラスト 近藤理恵

グラフィックデザイン 阿部美智子

考える力を耕す保育

平松知子 ● 愛知・けやきの木保育園

6

声 幼児期って何が大切？

16

あそび.....あそびをとおして育つもの

小論 幼稚園・保育所の子どもにとってあそびが大切な意味

24

勅使千鶴 ● 日本福祉大学

実践① 四歳児の集団って？？ 36

吉川麻美 ● 神奈川・上末吉白百合保育園

実践② 夢中になれるあそびからなまづくりへ 44

岸田康恵 ● 大阪・こばと保育園

友だちとかがわる……………子ども同士のかかわりから生まれるもの

小論——友だちのなかで育つ子どもたち

52

西川由紀子 ● 京都華頂大学

実践①——一四人のなかま……………ずっとずっと友だち

64

鈴木早紀子 ● 埼玉・あかねの虹保育園

実践②——異年齢の生活のなかで自分で気づき、主体的に生活していく力とは？

70

高羽亮平 ● 愛知・たんぽぽ保育園

学ぶ……………幼児期の教育とは？

小論——保育のなかの学びを考える

78

鈴木佐喜子 ● 東洋大学

手記①——保育園でよかったこと、ベスト3

90

植田三千子 ● 大阪・吹田市立西山田保育園保護者

手記②——土・水・太陽・お友だちに囲まれてたくましく育ったわが子たち

94

森井典子 ● 島根・おおつ保育園保護者

幼児期だからこそ身につく力とは

98

大宮勇雄 ● 福島大学

愛知・けやきの木保育園

平松知子

ひらまつ ともこ

二〇〇七年、名古屋市長岡武保育園廃園民営化を受託開園した
社会福祉法人熱田福祉会けやきの木保育園園長に就任
民営化の実際や、今求められる保育所の役割などについて
発信し続けている。著書に

『保育は人 保育は文化』

『大人だってわかってもらえて安心したい』

『子どもが心のかっとうを超えるとき』

（三冊ともひとなる書房）など

考える力を

耕す保育

生活を共に過ごすなかで身につけること

「転ぶずっと前から先の杖」

「園長先生、年中になったら竹馬を買ったほうがよいのでしょうか？」

春に進級したばかりのころ、あるお母さんからたずねられました。聞けば、毎年の運動会で、五歳児が竹馬をやるようだから、年中くらいから家でも竹馬を買って自宅練習をする人がいるようなのです。びっくりしてあんぐりと口をあける私に代わって、そこにいたベテランのお母さんがこう言ってくれました。「買う必要なんてないよ。あのね、運動会の竹馬は、『なかまのなかで乗れるようになる』のだから。ね、園長さん」と。

竹馬を自宅でも買って、これを機会に家族で竹馬を楽しむというのなら「それもアリか」と思うのですが、もし「五歳児の運動会で乗れなかったらどうしよう」という不安から、保育園で取りくむ前から家で練習をし、「みんなより先に乗れるようにさせてあげたい」という気持ちがあるのなら、「そんな心配はしなくても大丈夫だよ。子どもは親が思っている以上にけっこうたくましいよ」と言いたくなります。このことにかぎらず、最近少し気になるのが、わが子を愛しく思うあまりに、失敗させぬよう、困らぬよう、恥ずかしい思いをさせぬように、親がちゃんと、「子どもがやろうとする前に」杖^{ツヅ}を用意しがちな風潮です。「転ばぬ先の杖」は、自分の経験から自分に杖を用意してしまうと、お宝の経験を奪ってしまうことになり、おとなが先回りして子どもの杖を毎回用意してしまうと、お宝の経験を奪ってしまうことになることを、親のみなさんと考えあいたいところです。そして、そんなかけが

えのない「お宝の経験」を積めるのが、保育園などの「集団生活の場」なのです。

保育園にはお宝がいっぱい

生活の場である保育園には、葛藤したりうまくいかなくてくやしき思ったり、思わぬハプニングで困ったりするようなお宝の体験がいっぱいあります。

幼児になると、乳児のころから耕してきた「自分らしさ」を力に、友だちとのやりとりのなかでさまざまなことが起きてくるので、利害関係も人間関係もあわさって、実に豊かな生活体験が繰り返られています。二歳児の後半あたりからでしょうか、ようすが変わってくることを保育者は気がつきます。自分の気持ちをわかってもらいたくって「だって、くだったんだもん」と事情を説明する言語力に、トラブルくらいで楽しかったあそびを中断してなるものかと、「じゃあさ、するのはどう？」などと折りあいをつけるために粘り強く交渉する力も身につけていく、実に頼もしい時代です。そこでは、個人の問題ではない、「集団の姿」が問われるようになっていくわけです。そして、「三歳児クラスくらいからは、保育の中心が「乳児期の生活づくり」に、「自分ともう一人の友だち」との暮らし、やがてはグループや「オレたち、みかんくみ だもんな」というなかま意識がめばえる幼児期の集団づくりが保育の大きな部分を占めるようになっていきます。

いくら仲よしでも、違う人格の集まりですから、さまざまなトラブルや葛藤も、集団づくりなかまづくりにはつきものです。三歳児時代にたつぷりと「みんなであそぶと楽しい！」という経験を積み重ねてきた子どもたちは、四・五歳児クラスでは、さらになかまのことも自分のこともより深く見つめるまなざしをもつようになります。この時代に、私たちは生きるうえでとても大切な力が身についていくと感じています。それは「考える力」です。まさに、乳児期の生活リズムと並ぶ、幼児期のお宝であるのです。

なかまをくぐって自分を見つめる

「自分が一番」「私ってすごいでしょう？」と自分中心に地球が回っている唯我独尊の三歳児時代から、四歳児になると急に一步ひいたり、ひるんだりするようになっていきます。紙じゅうに頭足人を描いていたのが、「うまく描けんもん」と描くことを渋る子も、鉄棒やコマの練習を隠れてやる子も、周囲がよく見える発達の段階に入ったからこそその姿です。「じゃうずだね」とほめられても「うん、でもあの子のほうがもっとうまくなるよ」と言うのも四歳児らしい姿です。「できる」「できない」や「うまい」「へた」という二分的評価が一時期支配するのですが、それも空間や時間の経過の認識が育つとともに振り返りができるようになると、また変わっていきます。保育者はそこを逃さず、たとえば登り棒でも「きのうはここまでしか届かなかったのに、きょうはもっと上まで登れるようになったんじゃない？」と、「登れたか」「登れないのか」の間に「真ん中の進歩」という中間の思考の目盛をきざむ働きかけをしていきます。それは、「きのうよりちょっとすごい自分」に気づき、再び「オレってやるなあ」という自信とともに、「もっとやればもっと上に行

けるかもしれない」という意欲を育てます。目の前に魅力的なおもちゃを見つけたら、鼻をふくらませてハイハイをしていた、ゼロ歳児の表情そのままの愛しい姿です。が、ゼロ歳児とはまったく違うところがあります。それは、おとなだけに評価されていても、どこか物足りなくなる幼児さんの姿です。だって、その意欲の源には、「あんなふうになりたい」と願った憧れの友だちの姿があったからです。なかまにこそ認められたいし、なかまががんばっているところを見ていてくれる安心感が何よりも次の意欲につながるのです。そして五歳になると、もつと深いところでなかまをくぐって自己を見つめる作業が、心のひだひだを豊かに形成することへとつながっていくのです。私たちが最も大切にしたい「考える力」がみがかれる五歳児保育です。

自分と向きあいなかまに向かう

五歳児になると、当事者だけの問題ではなく、集団の問題としてみんなで考えあう姿が出てきます。夏のプールあそびで心もからだも解放してあそびきったあとに来る運動会では、多くの園が個人技の取りくみも、集団のなかで教えあい、高めあう実践をしています。そして、「話しあいの種目」と言われる「リレー」に取りくむ園も多いのではないのでしょうか。リレーは、足の速い子もそうでない子も、走ることが得意な子も苦手な子も、みんながバトンでつながるチームの種目です。自分が速く走っても負けることがあるし、足が遅くても勝つことだってできるのがリレーです。保育者は速く走れる子だけが花形にな

ってしまい、「足を引く張る」子が悲しい気持ちになるようなことがないように、さまざまなことに留意しながら、リレーあそびから本番までの計画を立てていきます。

話しあいの種目リレー

運動会に向けたリレーの取りくみでも、子どもたちはさまざまな表情を見せてくれます。マサト君は、負けるべくやしくて思わず相手チームの子を殴ってしまいました。「勝ったからって喜びすぎだ!」。まったく理不尽で自分本位の気持ちだが、マサト君の行動の源となっていました。大泣きのマサト君のなかには、確かにくやしさがあるのだけれど、それが他者非難となって怒りの感情にすり替わってしまうところと、そんなマサト君に対して、誰も何も言わない集団も気になるところでした。また、そのころのマサト君は、自分のチームが負けたのにご機嫌のときもありました。不思議に思ってたずねると「だって、オレのときは勝ったもんね」と、チームとしての勝ち負けではなく、自分がバトンをもらったときの一周の勝敗が勝っていればそれでよいという認識だということがわかりました。まだ「チームのリレー」ではなく、「オレのリレー」の段階なのでした。

一方で、勝ち負けにまったく無関心のように見える子どもたちもいました。勝っても負けても「べつに」という表情で、負けていても笑って走れちゃう姿は、必死に勝とうとしている子たちにとっては許せないものでした。「真剣にやっつてよ!」「笑わんでほしい!」と責められると、表情がみるみるこわばります。「だからいや!」「怒らんでほしい」。ど

うやらそんなに速くは走れない子たちは、真剣にやらないことで、リレーの責任から逃れたいような気持ちがあることがわかりました。

走る順番決めでは、なんとしてもトップバッターやアンカーをやりたい子たちも現れました。マサト君は「オレが一番がいい！ だって速いもん」みんなは黙っています。「へえ、マサト君が一番速いんだ」と保育者が言っても、誰も何も言いません。そこに「私も一番がいい！」というマコちゃんが声を上げると、「オレだって」「私だって速い」とポツポツと声が上がってきました。やっと上がってきたその声をひろって、「では一番がやりたい子で走ってみよう」ということになりました。結果はマサト君より速い子がたくさんいることがわかりました。それでも「マサトが一番なの！」と言い張るマサト君に、気のやさしい集団は譲ってしまうのでした。

生活を共にする保育園集団ならではの営み

リレーにはいろいろなことが起こります。バトンを落としてしまって、その場で立ち尽くしてしまったり、抜かされた瞬間にやる気をなくして力を出さなかったり、転ぶことだっていっぱいあります。そんなときは、その当事者がどんな気持ちだったかを、みんなで考えあうことを大切にしました。「きつと困ったんだと思う」「どうしようかって」「でも、止まらないでほしかった」「最後まで走ってほしかった」と、正直な気持ちを伝えあいます。また、「転んじゃうくらい、いっぱい足を動かして走っていたんじゃない？」と気づ

いたら、そこには「だって勝ちたいんだもん」という共通の願いがなかまたちのなかにあることを、子どもたちは日に日に感じるようになっていきました。

しだいに、リレーあそびは真剣さを増し、メンバーも固定になり、やるたびに「何がよくなって勝てたのか」「どうして負けたのか？」をそれぞれが考えあうようになりました。そんな雰囲気の中、マサト君が「誰が一番に走ったらいいと思う？」の話しあいで、自分ではない友だちの名前を挙げるようになりました。びっくりするなかまたちに、「そのほうが勝つから」というマサト君。「オレのリレー」から「チームのリレー」になった瞬間でした。

あるとき、初めてアンカーをやることになったジン君は、小声でこう言ったのです。「ねえ、負けてもオレのせいにしてないでね」。アンカーの重責を感じるからこそそのことばに、おとなはクスツと笑ってしまいそうでしたが、本人は真剣です。すると、トップバッターになったタイシ君が「だれも怒らんよ。それに、オレがすつごく速く走ってやるから大丈夫だ」と言ってくれたのです。一方のチームでも、最初は大幅に負けていたのに、最後で抜かしてゴールしたユウコちゃんに、みんなが駆け寄って「ありがとう！」と言ったときも、ユウコちゃんはキョトンとしてこう言いました。「なんで？ みんなががんばった（差を縮めてくれた）からじゃん」。こうして、一人ひとりの力が合わさって、その「チームの力」になることを、みんなわかってきたようです。

そんなに速く走れない子のがんばりも光りました。でも、本当にうれしく思ったのは、その子たちのがんばりを、なかまが見てくれたことでした。アンカーを走る子たちも

「サユ、速く走れるようになったな」と駆け寄って伝えたり、コーナリングがうまく走れなかった子たちに、「こうやって走ればいい」と、ラインどりを先頭を切って走って伝えたり、「自分さえよければいい」のリレーは、どちらのチームからもなくなっていました。振り返って、どうすればよかったのかを考えあい、そのとき友だちはどういう気持ちだったのか思いをはせて、チームで合意を形成していく作業を、リレーの取りくみは積み重ねていきます。その取りくみのなかでは、どの子も一生懸命に走っていることが、まずなかまへの信頼になり、「勝ちたい」「かっこいいリレーを見せたい」という共通の願いに向かって、チームやクラス集団にまとまりができました。

人にはそれぞれ事情があつて、どんな行為にも理由があることを、なかまたちは理解していきます。大人数の集団では、なかなかいねいに全員の気持ちを全員で理解しあうことが簡単にはできなくなっています。しかし、私たちは考えました。全員が全員のことはなくても、その子のことを誰か必ずわかつてくれてくれる友だちがいて、その子がまた誰かに伝える力をもっていたら、みんな考えあえる集団になっていけるのではないかと。それは、生活を共にしている保育園集団ならではの営みであり、人とかわかることで、たくさんの考える力を身につけていくのだと感じています。

考える力を耕す保育

集団保育のなかで、そのほかにもたくさんの考えることに出あいます。自然の変化に気

づき観察するまなざしや、お手伝いや当番活動で、仕事の中身を深めることもあります。どんな場面でも、共通していることは「それらがなかまのなかで行われる」ということだと思えます。ひとりよがりではない、みんなとやる活動のなかだから、考えあつていい方法を見つけていく作業ができます。私はこれこそが学校教育の前に大事にしたい、人とかかわるなかで身につく教育だと思います。成果主義や競争社会で、誰かに勝ったときだけ、誰かよりもうまくいったときだけほめられる子育てや教育では、なかまとともにどうしていくのかを考える力は育ちません。「自分らしくあれ」と、どんな私を見せても受けとめてくれる安心感のなかでこそ、その子の子らしくいい顔で歩いていけるのではないのでしょうか。

学校に行く前の、失敗しても間違えちゃつても、「えへへ」と笑いあつて育つ集団保育の安心感を、どの子にもお土産にして小学校へ送り出してあげたいと思います。